シェイクスピア・エクスプレス

神無月恭一郎の冒険

皆川ゆか

皆川ゆか（みなかわ・ゆか）
1965年福岡県生まれ。松戸市在住。血液型B。
好きな飲みもの：ポカリスエット。作品に『ぱらどっくすティー・パーティー』『すくらんぶるティー・パーティー』『ティー・パーティー　古都を行く』『今夜は夢にてティー・パーティー』『神無月恭一郎の冒険』『めるへん気分でティー・パーティー　前編』『めるへん気分でティー・パーティー　後編』がある。

講談社X文庫

シェイクスピア・エクスプレス
神無月恭一郎の冒険
皆川ゆか
●
1989年5月5日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者――加藤勝久
発行所――株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
本文印刷―豊国印刷株式会社
製本――株式会社 千曲堂
カバー印刷―半七写真印刷工業株式会社
デザイン―山口　馨
©皆川ゆか　1989
Printed in Japan

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。なお，この本についてのお問い合わせは第三編集局企画部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-190300-4
（三企）

講談社X文庫

シェイクスピア・エクスプレス

神無月恭一郎の冒険

皆川ゆか

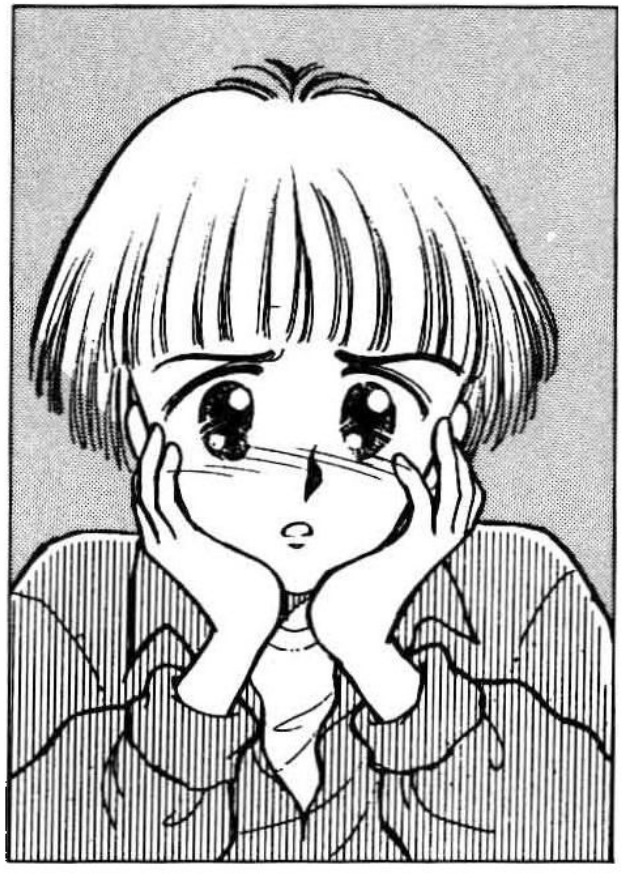
目次

第1章　LDの傷の五分の魂から腐れ縁の可能性までの展開……8
第2章　ハリケーンへの覚悟から隔世遺伝の証明までの展開……31
第3章　モダンアートの天井からブラックホールを脱出するまでの展開……43
第4章　チケット売り場から歴史的財産とシベリアの関係までの展開……52
第5章　鉄面皮の美丈夫の正体から物干し竿を抱えた〝猫〟までの展開……74
第6章　白山の休火山噴火からキリスト＝スーパースター説までの展開……93
第7章　創造的生活の商店からマリリン・モンローのリターンまでの展開……109
第8章　『戦艦ポチョムキン』から『俺たちに明日はない』までの展開……126

第9章　カボチャの大群からソロモン王好みの数値までの展開……145
第10章　黄金の新幹線からカワイイ女の特徴の判明までの展開……160
第11章　表参道のお化け屋敷からベニスの商人までの展開……172
第12章　巨大UFOの照明から帽子屋的恭一郎の筆跡までの展開……193
第13章　映画俳優じみた恭一郎から神無月の家訓までの展開……217
第14章　老紳士の熱いまなざしからタタタのリズムまでの展開……237
第15章　ターボエンジンの論考から老紳士が友情に感動するまでの展開……250
第16章　ミニチュア天使の降臨からミトコンドリアの研究決意までの展開……268
あとがき……283

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

登場人物紹介

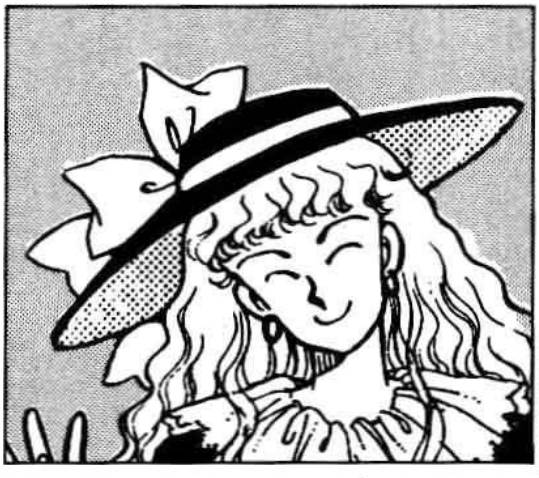


●冴木しのぶ

私立三崎女学園の二年生。両親の海外赴任のため、現在祖父と二人暮らし。とんでもないドジなので、「トジのぶ」などと呼ばれているが、根は健気と元気のコ。一か月前、妙な事件にまきこまれた際に恭一郎と知り合った。その後事件は一件落着し、彼とも縁が切れたと思っていたが――そうは問屋がおろさなかったのだった……。

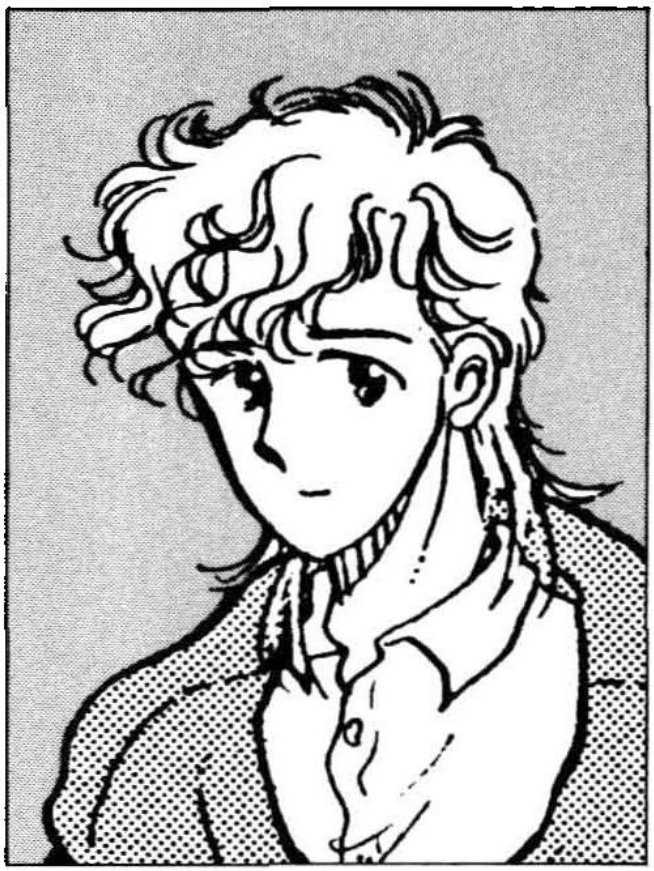
●冴木権左衛門

しのぶの祖父。古代文明の民間研究家として名を成している。起き上がり小法師なみの根性をもつタフ老人で、なかなか話せるところもある。その膨大な知識を駆使して、しのぶと恭一郎のコンビを助けてくれる。



●帽子屋

恭一郎のライバルで、同じ物を争っての騒動は星の数。変装が大好きで、本人も得意だと思っているが、男のくせに何故か女にしか化けないので、せっかく見た目は完璧でも、口をきくとまるでイケナイのだった。



●神無月恭一郎

日常生活と不思議世界の狭間で生きているような、ものすごい美形青年。行動は神出鬼没、ライト・バイオレンスのノリでもって危機と窮地を弾き飛ばし、目的を全うする。これまで、公称年齢十八歳、運転手つきのロールス・ロイスを乗り回し、超キザである、以外のディテールは不明だったが、今回少しばかり明らかにされる。

●宮里鹿の子

恭一郎のまたいとこ。猫を思わせるような身のこなしの、とんでもない美少女。親の決めた婚約を嫌がって家出した恭一郎を連れ戻すべく、ドでかいライフルを担いで現れる。

●オブライエン卿

薔薇十字団の〝正当な〟後継者。『ロミオとジュリエット』の原稿に隠された暗号を解いて、「ソロモンの指輪」から力を解き放ち、世界を薔薇十字団の支配下におこうと企む。

●アポロ　オブライエン卿が作った機械人形たち。太陽神アポロを思わせる美しい姿をしているが、冷酷無比。

●楠老人　恭一郎の運転手兼お目つけ役。何かというと思い出話を始めるので、さすがの恭一郎もマイっている。

イラストレーション／佐藤まり子

シェイクスピア・エクスプレス

神無月恭一郎の冒険

第1章　LDの傷の五分の魂から腐れ縁の可能性までの展開

がたっ、がたっ――

高架を電車が走っていく。JR総武線だ。秋晴れの空に黄色い車体が映える。

けれど、街のほうがもっと鮮やかだ。ビルにつけられた看板には、原色で店の名が書かれている。屋上に置かれた広告塔はひっきりなしにネオンを点滅させ、店の宣伝をしている。壁に下げられた垂れ幕は、色とりどりの字を乗せ、風を受けて揺れている。『CD』『ラジカセ』『パソコン』『ワープロ』『冷蔵庫』『エアコン』……太い字で描かれた単語が躍る。

秋葉原、電気街――狭い歩道は人ごみでごったがえしていた。平日だというのに、かなりの人出だ。もっとも、今日は土曜日で、時刻は一時半を少し回ったところだから、当然といえる。歩道にはOLや会社員の姿が数多く見受けられた。学校帰りというのもボクらだけじゃない。

「わっ」

かたわらで悲鳴にも似た声があがった。いっしょに来ている友人の恵子だ。ボクは足を止

めて彼女のほうを見やった。と、肩がぶつかってくる。誰かに押されたらしい。よろけながらもボクは彼女を支えた。

「なにすんのよっ！」

恵子は人ごみに向かって叫んだ。声のほうには、頭ひとつ飛び出して金色の髪が見える。かなり急いでいるようで、頭は激しく上下に揺れながら遠ざかっていた。金髪のまわりから、それに合わせて声があがる。

「バカヤロっ」

「気をつけろ」

「謝んなさいよ」

どうやらこの金髪が恵子を突き飛ばしたらしい。こいつは砕氷船さながらに人ごみを進んでいるのだ。さしずめ、恵子たち被害者のあげる苦情の声は、氷の裂ける音だろう。

氷が泣こうがわめこうが、砕氷船には関係ない。だから進む。ひょっとしたら日本語がわからないのかもしれない。それにしたって、この行為はあまりにも非常識だ。砕氷船は歩道を進むものじゃない。

「ムッとくる外国人ね」

ボクから身体を放しながら、恵子がいう。目は金髪からはずさない。秋の陽射しに照らされ、金色の髪はまぶしく輝いていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なにかを探しているのか、金髪はきょろきょろとあたりを見回す。けれど、それはほんの一瞬だった。足を止めることすらしない。そのまま角を曲がってボクの視界から消えた。

顔が見えたのはわずかな時間だったけれど、ボクの網膜にはしっかりと焼きついた。ギリシア彫刻のアポロだったのだ。比喩とかじゃない。彼の顔立ちは美術の教科書や歴史の本で見る、アポロの彫像そっくりだった。もっとも、彼のほうには色がついている。巻き毛は黄金、瞳は蒼、同じなのは白い肌くらいなものだ。世間には似た人が三人いるというけれど、ギリシア時代のそっくりさんが二十世紀にいるとは思わなかった。もしかしたら、埴輪や土偶にそっくりな人間だっているかもしれない。

ただ、ぶつかられた恵子としては、相手がアポロだろうが、埴輪だろうが関係ない。

「とんでもないオノボリさんだわ」

不機嫌という塗料をどっぷりつけた口調でいった。ボクもアポロに同情の余地はないと思ったものの、

「なんか探してるみたいだったけど」

いちおう感じたことをいってみた。きょろきょろとあたりを見回していたのは、たぶんそのためだと思う。けれど、恵子は吐き捨てるかのように、

「おおかた安い電卓でも探してるんでしょーよ」

そうかもしれない。少なくとも南極大陸を探しているわけじゃないことだけは確かだ。

ひょっとしたらギリシアを探しているのかもしれない。

信号の赤い光の中、白い人影が浮かび上がる。中折れ帽子をかぶった紳士のシルエットだ。きちんと両手を身体につけ、足をそろえて直立不動の姿勢をとっている。

ボクと恵子は信号が青にかわるのを待った。もちろん、ボクらは直立不動じゃないし、中折れ帽子もかぶっていなかった。これは信号待ちの礼儀に反することなのかもしれない。けれど、今どき中折れ帽などというものをかぶっている人がいるとは思えない。道路の向こう側にもこちら側にも、そんな恰好で信号を待っている人はいない。

礼儀にはずれたボクらの前を車が走っていく。上り下り、何十台という車がひっきりなしに続いていた。通りすぎるたびにフロントガラスがピカピカと光る。もっとも、その光にひと月前の強さはない。

十月――先月の頭まで残っていた暑さも、すでにどこかへ行っている。来月あたりにオーストラリアを襲撃するべく、山奥で調整に励んでいるのかもしれない。

ボクの部屋のカレンダーは一枚めくれて、紅葉に色づく山々の写真になっている。薄くなったカレンダーのかわりに、着ている服の枚数は増えた。今だって、ブラウスの上にブレザーをはおっている。ジャンパースカートと同じく、濃い青をしたダブルのブレザーだ。あとふた月もしないうちに、この上へコートを着る。そして、南半球では夏の光の下、サンタクロースがダイエットに励む。

「一か月」

ボクは口に出していってみた。実感はあまりない。あの二日間の出来事は、つい昨日のことのように思える。ソロモン王が隠したという財宝をめぐる冒険……。

たぶん、今の生活の密度が薄いからだ。このひと月というもの、その日その日はおそろしくゆっくり流れている。けれど振り返ると、流れは急流となって滝つぼへ落ちているのだ。旧石器時代だってもっと波乱に満ちていたろう。学校へ行き、帰る。メインディッシュの決まったフルコースを毎日食べさせられるほうがずっといい。

もっとも、以前に比べて密度が薄くなったというわけじゃない。今の生活は高校に入学してから一年半に渡って——休みの間は除いて——ずっと続いている。考えてみれば、小学校、中学校だって同じようなものだった。

かわったのはボクのほうなのかもしれない。たまたま日ごろよりも刺激の強い料理を食べたため、薄味のものが蒸留水のように感じられるのだ。

やれやれ、と思った。社会復帰はまだ完全じゃないらしい。たった二日間のことがこれほど後を引くとは考えてもみなかった。日焼けだってひと月もすれば消える。

「一か月」

ボクはもう一度つぶやいた。

「そう、一か月」

恵子が繰り返す。もっとも、こめられた意味はまったく違う。
「あたしは一か月も待ったのよ」。彼女は悔しげに続けた。「発売日が待ちどおしくて、幾晩眠れぬ夜を過ごしたことか。カレンダーに×印をつけて、あたしは待ったのよ。それが、それが……」
「恵子、それってもう、三万四千回くらいきいてるよ」
ボクはうんざりした声でいってやる。恵子はわずかに口をとがらせて、
「そんなにいってないわよ」
信号がかわったので、ボクらは歩き出した。まわりの人も動き出す。いっせいに流れ出す人の姿は、津波を連想させた。
「もののたとえだよ」
恵子の抗議にボクは弁明する。もっとも彼女は、
「たとえにしたって、あんまりだわ」
「でも、朝からいってるよ」
横断歩道のまん中あたりで、両岸からの波は交わっている。真上から見たなら、きっと雁の大群を思わせる光景だろう。重なり合い、すれちがう。〝雁、雁、鍵になぁれ〟
ボクは向こう側から渡ってくる人をよけながら、続けた。
「何度もきかされる身にもなってよ。耳にタコができちゃったらどうすんのさ」

「しのぶにこの悔しさがわかって？」
恵子は片手に持った紙袋を軽く動かしてみせた。店の名前が印刷された紙袋の中には、レーザーディスクがはいっている。彼女が心酔しているロックバンドのライブを収めた盤だ。
「発売日だった昨日、家のプレーヤーにこれをかけたときの感動。そして、それからきっかり二十三分三十一秒後、モニターの中にくっきりと映った……」
「傷」
彼女がいおうとした単語を、ボクは口にした。恵子は大きくうなずく。顔には悲痛としかいいようのない表情を貼りつけていた。
「そう、傷があったのよ」
話しながら歩いていたため、ボクらが向こう岸に渡り着いたとき、信号はすでに点滅をはじめていた。
「レーザーディスクってよくわからないんだけど」
ボクはあらかじめ断っておいて、たずねてみる。
「その傷って、どんなの？」
質問に対して恵子はゆっくりと首を左右に振った。思い出したくもないといった感じだ。
「あのうるわしの……」、彼女はボーカルの名を挙げた。「……サマのお顔に、白い線がはい

るのよ。白い線がっ！」
「その線て、どれくらいの大きさ？」
恵子はボクの問いに「これくらい」といって、親指と人差し指を広げてみせた。およそ三センチといったところだろう。虫なら五分の魂を持っている。
「恵子のところのTVって確か、二十八インチだった……よね？」
ボクはおずおずときく。恵子はなんでそんなことをたずねるんだって顔で、
「そうよ」
あっさりとした返事をよこした。ボクはあきれ顔になりそうなのをこらえて、さらに問う。
「たったそれくらいの傷で取り替えに行くの？」
「たったとはなによ！」
ボクのものいいに、恵子はカチンときたらしい。ムキになってくってかかる。
「この傷ったら、あの見目うるわしいお顔を、なんと二コマに渡ってかすめていくのよ」
「二コマね」
やれやれ。
「で、ボクはその二コマの傷のためにつきあわされたわけ、学校帰りの、それも土曜の午後に？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com